第２２１回　「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

日本国中、今はどこに住まいしても、変則的な気象ではないでしょうか。朝と昼間の気温の差が驚くほど隔たり、それが10度も違う地域が驚くほど記録されています。それに関東地方では、これは偶然なのでしょうが、５月の大事な稼ぎ時に、３週連続して週末は雨に見舞われ、観光地としてコロナ禍の集客不足を挽回しようとしたものの、渋い結果に終わったようです。最近の私はというと、いつもの緑濃き川沿いのウオーキングコースを、５キロほど歩き、つつじやシャクナゲ、芽の出始めた紫陽花を見て歩いています。

さて、５月の「道草」句会ですが、５月１２日（金）に「新橋ばるーん」２０２号室にて開催致しました。今回は下述の９名のメンバーが集まりました。今月の兼題を披露します。併せまして皆さんが選んだ優良句と天賞句並びに最多得票賞句（☆印）も、以下に披露致します。

今月の兼題
　兼題１「筍」
　兼題２「麦の秋」
　兼題３「当季雑詠＝初夏・三夏＝」

今月の投句参加（１８名）
　芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
　金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、
　辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原 晶如さん、舩戸清助さん、
　本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。
リアル句会への参加（９名）
　創風さん、和感さん、月草さん、明峰さん、柴楽さん、晶如さん、傘吉さん、
　多佳さん、白然。

今月の優秀句と天賞句
兼題１.「筍」
◎『筍やつまづきて知るその在処』　和感　　天３☾７
◎『若竹の椀に一片葉山椒』　歌多音　　天２☆10
◎『若妻の筍剝けり赤き爪』　栄女　　天１☾６
◎『宿坊は筍飯と般若湯』　明峰　　☾７

兼題２.「麦の秋」
◎『酒にパン麦黄金色美味の色』　歌多音　　天１☾３
◎『マスク取れ子らはしゃぐなり麦の秋』　一光　　天１☾２
◎『ざくざくとコンバイン刈る麦の秋』　和感　　天１☾１
◎『機関車の煙は昔麦の秋』　明峰　　☆８
◎『麦の秋山裾までをひと色に』　傘吉　　☆８
◎『麦秋や戦火逃れて茨道』　清助　　☾５
◎『さはさはと風の香ばし麦の秋　晶如　　☾５

兼題３.「当季雑詠（＝初夏・三夏＝）」
◎『過疎村の勢ひ余る鯉のぼり』　傘吉　　天２☾７
◎『この家の主かも知れず蛇の衣』　晶如　　天１☆８
◎『菖蒲湯や頼もしかりし父の肩』　まさあき　　天１☾４
◎『五月雨や富士は滲みし三島宿』　栄女　　天１☾４

◎『歩む女垣根の薔薇にそつと触れ』　月草　　天１☾４
◎『清澄の空に草笛冴えわたる』　多佳　　天１☾２
◎『汗拭いちり紙持つたと母の声』　錦流　　天１☾２
◎『竹林の光の波に夏注ぐ』　明峰　　☾４

兼題１では、和感さんの句「筍やつまづきて知るその在処」が、天賞三つを獲得しました。筍堀りの経験者なら、多くの人が経験すること。探し当てた時を思い起こし、思わずニコリと笑顔が零れたでしょう。下五の「その在処(ありか)」の表現も良かったですね。次に歌多音さんの句「若竹の椀に一片葉山椒」が、天賞二つと最多得票賞（☆）印を獲得しました。句を読むだけで一片(ひとひら)の葉山椒の香りがしてきますし、椀の中の煮た筍の味まで想像できます。季節ですね。
次に栄女さんの句「若妻の筍剝けり赤き爪」が、天賞一つを獲得しました。若妻の赤き爪という洋式と筍を剥くという和式の対比に、シーンが鮮やかに見えてきます。見るからに、たどたどしく皮を剥いていたのではないでしょうか。時代ですね。妙に印象に残りました。次に賞からは外れましたが、明峰さんの句「宿坊は筍飯と般若湯」が、高得票でした。座禅の修行でしょうか、それとも説法を聴きに来たか、いずれにしましても般若湯つきとは・・・。これまたニッコリと笑顔が零れます。

兼題２では、歌多音さんの句「酒にパン麦黄金色美味の色」が、天賞一つを獲得しました。季語「麦の秋」と対比した場合、この句は少し無理があるかも知れません。投票した方はパンの黄金色と酒という組み合わせに、一票投じたと仰っていました。次に、一光さんの句「マスク取れ子らはしゃぐなり麦の秋」が、天賞一つを獲得しました。本来なら季語「マスク」は、冬の季語です。このコロナ禍からの解放があって、マスクはもはや冬の季語から外れているでしょうか。嬉しさ百倍、麦の秋の豊かさを感じます。
次に和感さんの句「ざくざくとコンバイン刈る麦の秋」も、天賞一つを獲得しました。機械の強力なパワーが、豊かな麦の稔りを刈り取っていく。さわやかなひと時ではないでしょうか。中七を「刈るコンバイン」にすると、リズムの流れが良くなります。次に明峰さんの句「機関車の煙は昔麦の秋」が、天賞はつきませんが、最多得票賞（☆印）を獲得しました。まさに機関車の煙は懐かしい昔話です。ですが、麦の秋の豊かさという満足感は、今も綿々と繋がれてきています。多くの票を獲得しました。
もう一句、傘吉さんの句「麦の秋山裾までをひと色に」も、天賞は付きませんが、最多得票賞（☆印）を獲得しました。麦の秋の黄金色が畑から山裾までの広大な地を黄金色一色に染めているというダイナミックさが、評価を受けたと思われます。次に賞には届かなかったのですが、清助さんの句「麦秋や戦火逃れて茨道」が、多数の共感者を獲得しました。太平洋戦争の悲惨を思い出されての一句と思われます。忘れてはならないことだと思います。もう一句、晶如さんの句「さはさはと風の香ばし麦の秋」が、賞は付きませんでしたが、高得票でした。風の香ばしさのさわさわ感、麦の秋の豊かさ、幸せいっぱいというところで、読者の共感を得ましたね。

兼題３の自由題句では、傘吉さんの句「過疎村の勢ひ余る鯉のぼり」が、天賞二つを高得票で獲得しました。過疎地における鯉のぼりの勢いは、どこか寂しさが漂っているようで、「おおい、元気を出せよ」と、声をかけたくなりますね。心に刻まれるような句ですね。次に晶如さんの句「この家の主かも知れず蛇の衣」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。下五に「蛇の衣」があるからいうのではありませんが、インパクトの強い句です。物語として「この家に同居していた、むしろ私たちより、早くから住まいしていた主ではないのか」という句意が、言外に語られています。見事です。
次にまさあきさんの句「菖蒲湯や頼もしかりし父の肩」が、天賞一つを獲得しました。幼き頃、父と一緒に風呂に入ると言うことは、喜びの一つでした。その洗い方にも特徴が

あって、痛いけれど我慢して洗い終わるのを待っていたものです。下五の「父の肩」も好いですね。次に栄女さんの句「五月雨や富士は滲みし三島宿」が、天賞一つを獲得しました。中七「富士は滲みし」は、雨に遮られて「滲んでいるように見える」ということでしょうが、 三島宿の温かさが表現されているように思えました。次に月草さんの句「歩む女(ひと)垣根の薔薇にそつと触れ」が、天賞一つを獲得しました。「何気なく触れる」という振舞いが、理解できるとの評がありました。類句が多いのではないでしょうか。

次に多佳さんの句「清澄の空に草笛冴えわたる」が、天賞一つを獲得しました。「上五」「中七」の「清澄の空に草笛」ですが、５月、６月頃に体験する見事に澄みきった空ですが、本当に青です。そのシーンに流れていた音階の高い草笛の音は、きっと気持ちを爽快に、かつ透明にしたのではないでしょうか。ご存じかと思いますが、「冴ゆ」という動詞は、「老ゆ」「映ゆ」「消ゆ」などと一緒に、下二活用動詞として「冴えわたる」などと使われます。「冴へわたる」とは言いません。

次に錦流さんの句「汗拭いちり紙持つたと母の声」が、天賞一つを獲得しました。この句は「上五」で「汗払い」とありましたが、季語「汗拭い」の誤字ではないでしょうか。毎日、朝の出がけに、母の声を思い出しての一句とお見受けしました。母の声掛けの中七を「ちり紙もつたか」とし、「下五」は「母の声」と、前の「と」を省略することを考えては如何でしょう。『汗拭い「ちり紙持つたか」母の声』と、何度も何度も読み返されればわかります。芭蕉はこれを「舌頭千転」と言いました。

次に明峰さんの句「竹林の光の波に夏注ぐ」が、賞はありませんが、高得票でした。大先輩に恐縮千万ですが、「竹林の光の波や夏兆す」では、如何でしょうか。ありふれて居ますでしょうか。

私たちの句会運営は「通信句会＋リアル句会」の方式で、ここまで取り進めて来てはいますが、兼題の提示という第一段階を、特定の方にお願いしてきました。この度、負担が大きいとの言葉をいただいているので、非公式に数名の方のご意見を伺いましたら、案の一つに、「兼題の提示」は止めにして、有季雑詠の自由題句を三句詠んで提出しては如何かとの意見がありました。こうすれば、特定の方に「兼題の提示」をお願いすることから解放されます。常々「歳時記」をよく読めと言われるのが「俳句つくり」です。歳時記を読み、自らが作句する三つの自由題句の季語を選ぶこと、これを各自がやる方法を思いつきました。６月の句会では、是非ともこのための時間を割いて、ディスカッションをしていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

（白然記）